

霧	驅逐艦	一七・七・五	北方方面
子ノ日	驅逐艦	一七・七・五	同
石垣	海防艦	一九・五・三一	同
薄雲	驅逐艦	一九・七・七	同
一一二	海防艦	二〇・七・一八	同

## 上海方面根拠地隊司令部

### 呉淞電探基地勤務の思い出

兵庫県 高島 孝 男

(旧姓 保田)

昭和二十年一月、海軍呉警備隊勤務時、上海方面根拠地司令部付を命ぜられ、上海呉淞派遣隊が編制された。昭和十八年十二月、学徒出陣の中村中尉を隊長とし、水兵科、機関科、通信科の総勢三九名の隊員であり、炊事は水兵科の隊員が交代制である。一等兵以上、下士官六名で、他の兵は三十五歳から四十五歳の召集兵で現地で教育の国民兵であった。

呉港より佐世保港へ、翌々日、軍の輸送貨物船で上海に向け佐世保出港、四日間を要して夜九時少し過ぎたころ、上海飯田棧橋に到着した。

港の岸壁近くで仮宿泊することになったが、古い二段ベットで仮眠したが、消灯してしばらくして点灯して驚いた。南京虫の大群である。南京虫に咬まれたのは、だれもが初めてということであり、隊員の中には首筋をひどく咬まれ、後遺症的に疥癬（皮膚病）となり、長期治療を要した（治療方法については後程記述します）。

翌日、上海陸戦隊本部よりトラック数台を回していただき、呉淞電探基地へ到着しました。基地は上海より約六キロほど北に行った農村の中ほどの約一キロ平方の用地にあり、ここに陸軍の通過部隊の兵舎と有刺鉄線で区分して幾棟かの兵舎が並んで建てられていた。海軍は十三号電探一基、一二センチ高射砲二門、二五ミリ二連機関銃一基を据え付けた装備である。これから設置の基礎の大半は前設営隊により終わっていたが、わが隊がこれを引き継ぎ、完全に完成させるまでには

約十日間を要した。

爾後、直ちに新入隊員の軍事訓練に移り、高射砲射撃操作訓練に重点をおき、繰り返し、繰り返ししの教練の毎日でした。召集兵全員が大坂出身の兵隊で、ある日教練休憩時に一隊員が、私に、

「保田機関長、あんたはんだ大阪一三の富士屋のボンボンやおまへんか、あて、おやっこさんをよく知っておりますっせ、わての息子も海軍に志願して今、上等水兵になっておりますわ。わても四十を過ぎてこんな訓練ほんまにしんどいですわ。もうちょっと柔らかく頼みますわ」

と大阪弁でいわれ、特に最後の「頼みますわ」の懇願じみて話す言葉にほとほと困惑したものでした。私は君の気持ちはよく分かるが、大阪弁は早く軍隊用語に直すように言い聞かせたものです。

電探操作は岡田、和田上等兵二名であったが、上手に作動したものの、日本製の十三号電探では一二〇キロがせいぜいであった（アメリカ軍のは飛行機搭載電探機で約二百キロもの探知能力を有していた）。

電探の建造建築物は、面積一〇坪程度の鉄筋コンクリート三階建てで、屋上にアンテナ、二階が操動室、一階が機械室である。私は戦闘時停電ともなれば発電機を始動し、切り替え送電する任務がありました。

やがて春、四月になった。既にイタリアは戦争に敗れ、ドイツも敗戦の様子となってきた。そして主戦場はアメリカ軍の沖繩戦と移っていった。

時に呉淞基地では別段変わったこともなく、週六日の訓練、訓練の繰り返しで、隊員の腕も上がってきた。しかし、前記した南京虫に咬まれた後遺症のある隊員が五、六名いて、疥癬の皮膚病が悪化し出した。当派遣隊に軍医はいないため、私がこの治療に当たることにした。まずドラム缶で硫黄風呂を作り、入浴後患部をよく拭き取り、その後ヨードチンキで殺菌し、次にタールパスタを塗り、ガーゼを当て繃帯を巻くという治療をはじめた。これが案外と早くよくなり出した。後日、上海陸戦隊本部の医務科に行き軍医に話したところ大変誉められました。

基地の北西側は幅四メートル、深さ三メートルくらいのクリークで、内側に有刺鉄線が張り巡らしてあり、その外側は田園や桃畑が広々としていた。このクリークで引き潮時に網を張り、大きな鯉や鮒がよく採れました。一度オスタンプ（鉄製のたらい）にいっぱい採れたとき、漁師出身者が料理してくれましたが、いずれも大味であった。

夜陰に乗じて桃畑から衣納袋に桃を徴発してくる隊員がおり、注意しても止むことがなかった。田園の麦畑によくキジが巢を作り雛を育てていた。一つの巢に一〇羽前後はいるのをここかしこでよく見かけたので、夜、網で伏せて採ってやろうと出掛けたが、親鳥はいち早く逃げ、雛を網で伏せたつもりが一羽もない。雛はその周辺に無数と掘っている蟹の穴に逃げ込んでしまふ、と現地の中国人に聞いた。

夜、月の光で見る田園風景は子供のころを過ごした故郷を思い浮かべ、歌手霧島昇が歌った流行歌「誰か故郷を想わざる」を基地の角の木造の古い馬小屋のところで、小さな声で一番から三番まで何回も繰り返し

歌う私でした。

「花摘む野辺に日は落ちて

みんなて肩をくみながら

唄をうたった帰りみち、

幼馴染のあの友この友

ああ誰か故郷を想わざる」

呉淞に四〇戸ほどの中国人民家があり、私が上等兵二名を連れ巡邏兵となり、巡察して回った。基地隣の陸軍通過部隊の兵士が金銭面で中国人と争いを起こしているのに注意したこともあった。余談になることだが、海軍は陸軍よりすべての面において待遇がよく、海軍の兵士の争いごとはなかったと思う。この派遣隊でも食料品の不自由、不足などなく、何でも缶詰製品で、五目飯、赤飯まであり、俸給面でも同等級で五円から一〇円くらい陸軍と差がありました。

昭和二十年七月二十五日、朝の九時ころ、突然上海大空襲が始まり、まずP 38が高空より偵察飛行、続いてB 24とB 29が爆弾投下し、その後を戦闘機P 51とF 4Fが銃撃してきました。約一時間半の戦闘であった

が、当基地も電探基地であったため逆探知され、戦闘機に銃撃を繰り返され損害を受けました。

この空襲時、上海陸戦隊本部では、連絡専務員であった関根一等兵が戦死しました。延べ二百機の空襲で上海地区初めての戦闘であり、わが軍は米国機十一機を撃墜したと後程聞きました。米国側は上海陸戦隊の壊滅作戦の目的であったと聞きましたが、空襲は一度だけに終わりました。

基地の外側で桃の手入れをしていた中国娘が爆弾の直撃弾で空中に舞い上がるのを目撃しました。後で見に行くと周囲を見回してみると一〇メートル四方に肉片らしきものを父親と思われる中国人が涙を流し、泣きながら拾い集めていました。

暑い夏となり、虱退治は日課の一つであったが、マラリアで井伊上等兵を病死に至らしめたのは残念で、今でも心残りがあります。マラリアには三日熱や熱帯熱などがあり、四〇度以上の高熱と悪寒が繰り返されるので、肝臓や脾臓がやられてしまうのです。

八月となり各方面の戦況が日に日に不利状態である

と、無線の傍受ができました。電探室には高性能な無線受信機があり、刻々と方々からの情報が傍受できるのです。沖繩の状況、ソ連の参戦、十五日正午の終戦放送等を我々は聞きながら残念でならなかった。

八月十九日、呉淞基地全隊員は武装して上海駅近くの民国本部の建物に移動指令がきました。建物全部が我が隊の駐屯するところとなり、我々は上海陸戦隊巡邏派遣隊となり、市内巡察の勤務となりました。

邦人街の人々とも大勢知り合いとなり親切にしてくださいました。九州佐賀県に引き揚げられた原洋子さん、島根県に帰られた安達利子さん、神奈川県に引き揚げられた町田悦子・治子ちゃん姉妹、今はもうお婆さんになられていることでしょう。

九月十一日、上海陸戦隊全員が浦港（プートン）の収容所入りとなりました。それから十月初め演芸隊が編成され、私は舞踊部員で船員姿で港シャンソン、女学生姿で名曲の「荒城の月」を踊りました。女学生に扮するのにオカッパ頭の髪を作ってくれた宝塚歌劇団の髪師の滝川さん、前進座の女形・池田さん、浪曲師

の妹尾さん、気合術の太田さん、その他三十名余の隊員であった。

昭和二十一年の正月も過ぎ二月一日付けで中華民国海軍に接收されました。私は旧日本海軍上海陸戦隊防北飛行場の機械設備関係一切の操動指導教官として中国軍に派遣されました。

中華民国海軍は昭和十八年六月ころ、日本海軍のある大佐が司令官となり、教官も日本海軍軍人で創設し、約七百人の中国海軍軍人を育成したと聞いていました。教育は日本語で行い、中国海軍軍人は、皆日本語は達者でありました。軍服も日本海軍のもので、帽章と鈕が中華民国標の違いで、規律も正しく真面目でありました。待遇もよく、指導面でも万事うまくいってました。

そしてここに四月二十七日までいましたが、一応教えも終わったので、ここを引き揚げることとなりました。思えば、私が十九歳八カ月の春のことでありましたが、あれもこれも遠き昔の思い出となってしまいました。